

# 第1回 社会運動と社会教育

担当：奥村旅人

# 講座の趣旨

- 社会運動の歴史的展開を、社会教育の実践に即して概観する。  
…ある意味で社会運動の中から生まれた、学校教育システム外の教育空間の歴史を検討する。  
→ 普段あまり顧みられることのない、「**学ぶ**」ということの**意味と可能性**を改めて考え直してみたい。
- 今の視点からみて、そのような空間における教育/学習の実践にどのような可能性を見出すことができるのか？  
キーワードは、「**自己教育**」と「**空間の意味**」？

# 講座の流れ

- 第1回（今回）：当たり前前に用いられている「教育」という事象について、一度立ち止まって深く考えてみたい。
- 第2回：戦前期の関西における労働運動の流れの中で誕生した「大阪労働学校」の実践を掘り下げてみる。
- 第3回：戦後期に京都に誕生した「京都人文学園」について検討する。
- 第4回：ここまでの議論をまとめて、改めて学ぶとは、知とは何かを考えてみる。

# 自己紹介

- 奥村 旅人（おくむら **たかひと**）
- 専門：生涯学習論・社会教育学  
特に、働く人々の学びに関心を向けてきた。  
労働学校の歴史や現在の労働者教育政策が研究対象。
- 出生：兵庫県尼崎市  
育ち（小～高）：大阪府柏原市  
それ以降：兵庫県神戸市、京都府京都市、兵庫県西宮市を転々。

# そもそも社会教育とは？

- **社会教育**…学校教育・家庭教育を除いた教育活動。  
→学校教育システムの外で行われてきた教育活動とだけ思っていたら良い。
- **cf. 生涯教育・生涯学習**…教育を、学校に限らず、時間的にも空間的にも拡張した概念である。
- **行政社会教育vs自己教育運動**という（古びた？）対立構図  
…行政社会教育が犯した大きな罪。  
今回扱うのは、自己教育運動として括られる活動。

# 本講座の考察軸とキーワード

- **自己教育** (autoformation) と **他律教育** (heteroformation)
- Gaston Pineauの提起。
- 自己教育…文化内容を他者から権力的に強制されるのではなく、学習者一人一人に固有な教育を自らが自らによって行うこと。
- 他律教育…他者によって行使される一切の教育形態。社会的に認知された文化の権力を保持している他者によって行われる。教育するもの／されるものが固定化される。

# 本講座の考察軸とキーワード

- このように教育というものを分けたとき、この講座で考えたい「教育の意味と可能性」というものは、必ずしも学校システム内の教育＝他律教育に限られない。  
後にも述べるが、学校教育の拡張には様々な負の可能性も存在し得る。
- 考えたいのは  
…人が決めた内容を「覚える」＝他律教育だけでなく、自分が学ばなければならないことを自分で決めて学ぶこと＝自己教育を行う必要があるということ。  
→他律教育だけだと何が問題なのか？

# 他律教育の〈知〉

- 近代社会における他律教育の代表格・学校教育システムにおける〈知〉の特質を検討してみよう。
- 学校教育では、一定量の「普遍的な」知識を外部から注入することが求められている。  
…識字・計算能力の涵養、「国民」としての同質性、全国共通テストなどといった事柄と学校教育は強く結びついている。
- 敢えて概念的に言うなら  
…他律教育（学校教育）における〈知〉の特質は、**抽象性、普遍性、連続性、体系性**と表現することができる。  
そして、このようなものが一般的に〈知〉として「君臨」してきた。



# 自己教育の＜知＞

- ＜ローカルな知＞（前平泰志）という概念

「人々がそれぞれの生活や仕事、その他の日常的実践や身の回りの環境についてもっている知識。特定の知識や実践の現場の文脈に固有のものであり、①文脈を超えた一般性を持たず、②文脈を共有しない外部の者には通常知られていないという意味で局在的（local）な知識」。

より一般的に言えば、学校教育で伝達される知識や技術のように外部からもたらされる知識と異なり、ローカルな知は、時間的、空間的に限定された文脈の中でのみ意味をもつ、「そのときその場の特定の事情の知識」であり、人々の生きる状況に依存してのみ意味をもち得る知であり、文化資本や人的資本という機能主義的な概念では説明できない、何ものにも還元できない知である。

# 自己教育の〈知〉

- 他律教育との対比で敢えて概念的に言うなら  
…〈ローカルな知〉の特質は、個別性、文脈依存性、不連続性、偶発性と言いつぶすことができる。
- 他律教育における〈知〉の特質 = **抽象性、普遍性、連続性、体系性**とは対照的。具体例を出しながら理解を深めてみたい。

# <知> と空間

- 他律教育における<知>を学ぶ空間にはどのようなものが適しているのか？
  - …被教育者の生活や歴史や経験は無用。
  - 教える空間＝教室は、教えるという一元的な機能に効率よく特化された空間、均質化され、抽象化された空間で十分。
- 自己教育とはどこで起こり得るのか？
  - …学ぶことは、本来、「どこでもないどこか」で学ぶのではなく、また「どこでもいいどこか」で学ぶというのでもない。とりわけ、おとなの学習者の学ぶプロセスは、学ぶコンテキスト＝空間（ローカル）と密接に結びついている。

## <知> と <教育関係>

- 少々暴力的に整理するなら、他律教育における<知>は「正解」「唯一解」を志向する。  
唯一の「正解」があるなら、それを知っている教育者が知らない学習者に伝達する（上意下達）という関係が成り立つ。
- 自己教育における<知>には多くの場合「正解」「唯一解」は存在しない。  
個別性・文脈性に依存した「最適解」を探し求めるしかない（実生活で起こる葛藤はほとんどのこの類だろう）。  
このとき、教育者と学習者の関係はどのようなものとして立ち表れるだろうか？

# 自己教育と他律教育

	時間・空間観	<知>に対する態度	教育者と学習者の関係
他律教育 heteroformation	均質化・抽象化・分節化された、機能限定的・機能外部的な時間・空間	抽象性・普遍性・連続性・体系性	おしえるものがおしえられるものに知識・価値をそのまま伝授する
自己教育 autoformation	「どこでもないどこか」でも「どこでもいいどこか」でもない、①主観性、②具体性、③固有性を併せ持つ時間・空間	個別性・文脈依存性・不連続性・偶発性	両者がともに<知>の創造を試みる

※もちろん、学校教育における<知>と<ローカルな知>はこのようにきれいに対比できるわけではない。近年、学校教育に「総合的な学習／探求の時間」が創設され、教科の知識の注入を超えた学びが目指されていることなど、反例は数多く挙げることができるだろう。

# この枠組みから何が見えるのか？

- ①他律教育≡学校教育は人生の大半の期間には受けられない。
- ②企業は他律教育の機会を提供しなくなっている。
- ③教育内容は「文化的な権力を持った他者」が決定する。  
→自己教育の「主体」となることはますます必要に。なのに、今の学校教育でそのような能力は育つだろうか。今の労働者たちはそのような「主体」足り得ているだろうか。  
→ピノーの言う通り、教育内容を「権力を持った他者」が決められていることは確かに問題である。  
それに加えて、学校教育を通して身体が他律教育に慣れ、教えられたことをそのまま覚えることを「楽」と感じることは自己教育の「主体」になれないことも問題ではないか？

# 次回予告

- 大阪労働学校（1922-1937）  
…現在の野田阪神あたりに創られた「学校」  
労働運動に関する知識に加えて、いわゆる「学問」（社会科学）や語学まで、幅広い内容の講義が展開された。
- 登場人物  
教育者 = 知識人  
**賀川豊彦**：関西地方の友愛会、総同盟の（元）中心人物。  
**高野岩三郎**：大原社会問題研究所の初代所長、日本初の労働組合とされる職工組合の生みの親、高野房太郎の実弟。  
**森戸辰男**：その弟子。大労校の中心的講師。  
**住谷悦治**：労働学校の戦前・戦後をつないだ人物。 *etc*

# アンケート

- 皆様にとって、「教育」「学習」「学び」「学校」とは、それぞれどのようなものでしょうか。  
いくつでも構いませんので、思いつくことをお聞かせください。  
最終回の議論の参考にいたします。